

人類学者と植民地行政官

—W・W・スキート『マレーの呪術』にみるアニミズム—

相澤里沙

はじめに

本論で扱うW・W・スキート (Skeat, Walter William, 1866-1953) はイギリス支配下のマレーシアにおいて、行政官 (district officer) であった人物である。仕事の余暇を利用して、マレーシアの民族誌を書いていた。行政官であり、民族誌家・民族学者でもある。彼の書『マレーの呪術』はマレーシアの宗教や呪術を研究するものにとっては、古典とされている¹。

1920年代にマリノフスキーやラドクリフ＝ブラウンによってフィールドワークが取り入れられるまで、宗教人類学においては、資料を集めるものとそれを分析するものがはっきりと分けられていた。資料を集めるものとしては、宣教師や行政官などが挙げられるが、彼らは実際に植民地に赴き、現地で暮らしていた人物である。資料を分析していたのは、タイラーやフレーザーに代表されるようないわゆる「肘掛け椅子の人類学者」である。「データを集める歩兵とそれを分析する学者」[Kuklick, 1991] という表現もあるように、従来そのような住み分けがあったと考えられているのがうかがえる。そのような分類に従えば、上述のスキートは「歩兵」に過ぎなかったととれる。

しかし、宣教師や行政官が資料を提供し、それで学者が研究し理論を提案するという一方的な流れであったわけではない。学者が提示した理論は現地に赴く人々に受け入れられ、それでもって現地の人々の信仰が記述されることになった。記述するさい、理論は彼ら独自の解釈がほどこされ、新しい意味を伴

1 Winstedt, R. O., 1925, *Shaman Saiva and Sufi: a study of the evolution of Malay magic*, London: Constable & Co. や Endicott, K. M., 1991, *An Analysis of Malay Magic*, Singapore: Oxford: Oxford University Press. に、マレー研究者としてスキートの名が挙げられている。

い、その理論をもちいて記述された資料は、再び本国で研究の材料とされた。したがって、当時の宗教に関する理論は、植民地と本国との知的交流から形成されていったと考えられるのである。本論は、スキートの民族誌を対象に、アニミズムや共感呪術といった宗教をめぐる言説を精査することによって、その過程を明らかにすることを目的としている。

1 W・W・スキートと『マレーの呪術』

先にも述べたように、W・W・スキートは、イギリス支配下のマレーシアにおいて行政官であった人物である²。

スキートの主著の一つである『マレーの呪術』(*Malay Magic*)は1900年に出版された。副題は「マレー半島のフォークロアと民衆宗教概論」(*An Introduction to the Folklore and Popular Religion of the Malay Peninsula*)であり、序文にも述べられているように「フォークロア、民衆宗教、そして呪術についての研究を紹介することを目的としている」[Blagden, (1900) 1965 : vii] 書物である。スキート自身も「この書の目的は主に、マレー半島において流行している様々な呪術的実践の、信憑性のある例を収集することと、これらの実践がもとづく

2 W・W・スキート (Skeat, Walter William, 1866-1953) は1866年ケンブリッジに生まれる。父 (Skeat, Walter William) は牧師で、ケンブリッジ大学古代英語学教授。本論で扱うスキートは1884年クライスツ・カレッジに入学し古典を専攻した。クライスツ・カレッジは、ダーウィンもその卒業生であり、ダーウィン以後の自然科学の中心であった。この大学の卒業者にトレス海峡を探検したA・C・ハドソンもいる。スキートは1888年にクライスツ・カレッジを卒業。1891年スランゴール州行政官 (クランの地区官補, 1893年にクアラ・ランガットの地区官補) になる。彼は定期的にマレー半島の民族についての論文を、彼自身も共同創始者である雑誌、スランゴール・ジャーナルに寄稿した。1897年セランゴールでの6年の勤務を終え、帰省。1898年にはペラクに戻った。1899年から1900年にかけて北西マラヤとタイへの探検を行う。

1900年、スキートはマラリアに感染したため行政官を解雇される。その後事務などで生計を立てる。1914年大英博物館の公認案内講師になるも、博物館が閉鎖された1914年から1918年の戦争の後半は植民省図書館で働く。1934年に大英博物館を退職しデヴォンシャーに移る。その後1953年まで著作活動を続ける。スキートの生涯と研究については Gullick [1988] を参考にされたい。

ところの信念の性質を示すことであった。」[Skeat, (1900) 1965: 579] と述べている。したがって、本書は二つの目的から著されたということが出来る。一つは呪術的实践の事例を収集することで、もう一つはそれらが基く信念の性質を示すことである。

『マレーの呪術』は「神話」、「自然に関する儀礼」、「人間の生に影響を及ぼす儀礼」というようないくつかの項目ごとに、実際にスキートが観察したマレーの慣習・儀礼や、他記者からの報告、そしてそれらについてのスキートの解釈が記載されている。

最終章は「占いと黒呪術 (Divination and Black Art)」と題し、マレー人が「靈魂を拉致 (soul-abduction)」する方法について述べている。スキートは、最終章で「靈魂の拉致」という項目を扱うのは意義があるとしているが、それは次の理由からである。

これまで述べてきたことと考え合わせると、それら〔靈魂を拉致する方法についての報告〕から、マレー人の靈魂概念についてほぼ完全に知ることができる。この概念がマレーの呪術とフォークロアの中心的特徴であると言っても過言ではなく、そこから様々な応用法をもったいろいろな部門が生じるように思える。[Skeat, (1900) 1965: 579]

スキートによれば、マレー人が「靈魂を拉致」する方法と、それまでスキートが挙げてきた様々な報告を考え合わせると、マレー人の靈魂概念についての観念をほぼ完全に知ることができる。そしてその概念は、マレーの呪術やフォークロアの中心的特徴であるという。

スキートは、このような靈魂が関係するマレー人の根本観念について次のように言う。

根本観念は、全てに広がっているアニミズムであり、それは人間と自然における、ある共通の生命原理 (semangat) を意味する。semangat は、より適切な言葉が欠如しているために、ここでは「靈魂」と呼ばれる。この宇宙についての一般理論を、個人の要件へ適用することが呪術を構成する。それ〔呪術〕は、マレー人が考えているように、神、人間、動物、植物、

鉱物などにおけるこの靈魂に、影響を与えたり、捕えたり、制圧したり、あるいは呪術師の意志に従わせたりする方法からなる。[Skeat, (1900) 1965 : 579-80] (傍点筆者)

このようにスキートはマレー人の根本観念をアニミズムであるとし、それは人間と自然における共通の生命原理 *semangat* であると述べる。*semangat* はそれに相当する適切な言葉がないので、この書においては「靈魂」と呼ばれている。呪術は、宇宙についての一般理論つまりアニミズムを、個人の要求に適用することである。ここでスキートのいうアニミズムとは、人間と自然に共通の生命原理 *semangat* があるという観念のことと捉えることができよう。スキートによれば、その自然の範囲は人間、動物、植物や、鉱物などの無生物にまで及ぶ [Skeat, (1900) 1965]。マレー人には「アニミズム」の観念があり、それをもとにした実践が「呪術」ということになる。

2 アニミズム

2. 1 タイラーによるアニミズム

「アニミズム」は、イギリスの人類学者 E・B・タイラー (Tylor, Edward Burnett, 1842-1917)³によって、1871年『未開文化』(*Primitive Culture*)にお

3 E・B・タイラー (Tylor, Edward Burnett, 1832-1917) は、1832年ロンドンのカンバーウェルで生まれた。両親はクエーカー教徒で、父と息子達は真鍮鑄造の商會を営んでいた。信仰上の理由から大学へ進めず、16歳のときから家業に従事した。23歳から結核の徴候が出始めたため、健康回復のためにアメリカ旅行に出かけた。この旅行中にハバナでヘンリー・クリスティと出会い、ともにメキシコに旅行する。この旅行の見聞記が『アナフアク』(*Anahuac*)である。これを機にして、タイラーは人類学的研究に従事することとなった。主著は1871年出版の『未開文化』であり、その後多くの学的榮譽を得た。1871年には英国学士會員特別會員に推挙され、1875年には、オックスフォード大学より名誉市民法博士の称号を贈られる。1883年オックスフォード大学ピット・リヴァーズ博物館の館長に任命され、1884年同大学人類学の講師となる。1888年にはアバディーン大学に開講された第1回ギフォード講義の講師として招聘される。1896年から1909年まで、オックスフォード大学の初代人類学教授に就任する。1912年、ナイト爵に叙せられ、1917年、85歳の生涯を閉じた。タイラーの略歴をまとめるにさいして、平野 [1985] と小川 [1985] を参考にした。

いて提唱された理論である。タイラーは、ヨーロッパ以外の土地と人に関する報告と、それを著した旅行家や宣教師、行政官などに対する疑問から、アニミズムを提唱した。

一般的な言葉で野蛮人には宗教的現象がないと述べる記者が、自分の表現が誤解されやすいということを示すことはめったにない。

広い言葉を狭い意味で使用することによって幅と一般性が与えられている判断が、いかにあてにならないかを示している。上記の人物たち〔記者〕は自分たちのものとは異なる教義を持つ民族を非宗教的であるとしている。

[Tylor, (1871) 1994a : 378]

タイラーは、自分たちの宗教以外を宗教と認めず、いわゆる未開人には宗教がないとした報告は、当てにならないと考える。「宗教的概念を持たないくらい文化において低な民族がいるだろうか？」と言うように、彼によればあらゆる民族が宗教を持っている。ある民族が宗教を持たないという報告は「観察者は、野蛮人の宗教を研究する機会があったが、目の前の事実を正当に取り扱わなかった」[Tylor, (1871) 1994a : 381] 結果である。

それゆえタイラーは「低民族の宗教についての体系的な研究において、第一に必要なものは、宗教についての基本的定義を定めることである」[Tylor, (1871) 1994a : 383] とし、次のように提案した。

宗教の最小の定義として、霊的存在への信仰 [Tylor, (1871) 1994a : 383]

これが「アニミズム」である。アニミズムとは、「靈魂と他の霊的存在一般についての教義」[Tylor, (1871) 1994a : 21] とされる。タイラーは『未開文化』において、主に低種族の間でのアニミズムを調査したと述べているが[Tylor, (1871) 1994a : 21]、アニミズムが低種族にしか存在しないと考えているわけではない。タイラーによれば、アニミズムは、野蛮人から文明人まで宗教の哲学の基礎である。人間性の尺度において非常に程度の低い民族を特徴づけるが、修正されつつ近代の高文化にも存在する [Tylor, (1871) 1994a : 385]。タイラーは未開宗教としてではなく、宗教の最小の定義として「アニミズム」を提唱した。すなわちあらゆる宗教にアニミズムは内在するということになる。

アニミズムは「靈的存在への信仰」であり、この靈的存在とは非常に幅の広い概念である。タイラーによれば、アニミズムは二つの大きな教義に分かれる。その二つの教義とは、死後存在し続ける個々の靈魂に関する教義と、鬼神や神々に発展していくその他の精靈に関する教義のことである [Tylor, (1871) 1994 a: 385]。この二つの教義は密接な関わりを持つ。というのは、「靈魂観念は、それら一連のもの〔鬼神、神々、その他の靈的存在〕のもとの観念である。」[Tylor, (1871) 1994b: 100]。つまり、靈魂観念がもとになって、精靈をはじめとする様々な靈的存在への観念が生まれたということになる。アニミズムの基礎にあるのは靈魂についての観念で、そこから他の靈的存在への観念が派生する。すなわち、アニミズムは靈魂のみに関する教義というわけではない。

2. 2 スキートによるマレー人のアニミズム

スキートがマレー人の根本観念を表すさいに用いたアニミズムは、タイラーによって上記のように提唱された概念である。タイラーによれば、アニミズムとは靈的存在への信仰であり、それはあらゆる宗教に内在する要素である。

この節では、スキートによるマレー人のアニミズムをみていくことにする。先に述べたように、スキートによればアニミズムとは、人間と自然に共通の原理 *semangat* があるとする観念のことである。この *semangat* について、スキートは次のように述べている。

人間の靈魂 (Semangat) についてのマレー人の概念は、一種の「親指のようなもの」、「薄く、非物質的な人間の形」、あるいは小人である。それは、睡眠、失神、病気のとき一時的に身体から不在となり、死後には永遠に不在となる。

この小人は、普通見えないが親指の大ききくらいであると考えられており、形、プロポーション、顔色においてさえ、正確にその化身あるいは覆い (sarong)、つまりそれが住まう体に一致する。それは触れられないわけではないけれども、「蒸気か影、あるいは薄もやのような」性質であり、しかし物質の中に入るや移動を引き起こす。それがすばやくあちこちに「飛

んだり」「通り過ぎたり」する時、しばしば比喩的に、あたかも鳥のようだと いわれる。

この小人があらゆる点でその肉体的対応物の複製であり、「それが生かすところの個人の生命と思考の原因である」とき、用意に擬似人間的感情が与えられ、そして「独立して、肉体の持ち主の個人的な意識と意思を持つ」かもしれない。[Skeat, (1900) 1965 : 47-8]

靈魂は、「(起きているときと眠っているときの両方) 身体から分離した幻影として人間のもとに現われ」、「身体的な力を表し」、歩き、座り、眠る。

[Skeat, (1900) 1965 : 49]

このようにマレー人の靈魂観を記述したあと、スキートはこれらの靈魂観がタイラーによる靈魂の定義に一致すると述べる。

マレー人の靈魂についての概念はすべて、タイラーの『未開文化』における古典的な定義に一致する。それゆえ、私は彼の正確な言葉をそれが適用される限り用いることをためらわなかった。[Skeat, (1900) 1965 : 49]

スキートはマレー人の靈魂観を表すさいに、タイラーの『未開文化』における靈魂観の定義を引用した。スキートはタイラーの提唱したアニミズムという言葉だけでなく、靈魂観の定義も用いてマレー人の信仰を記述したのである。

『未開文化』においてタイラーは次のように靈魂観を定義している。

低種族の間での人間の靈魂あるいは精霊についての観念は、次のように定義される。それは薄く、非物質的な人間の形をしていて、本質において一種の蒸気、薄膜、あるいは影である。それが生かすところの個人の生命と思考の原因である。過去も現在も、独立してその肉体の持ち主の個人的な意識と意思を持つ。肉体を遠く離れ、あちこちへすばやく動くことができる。ほとんど触ることも見ることもできないが、身体的な力を表し、特に起きているか寝ているかしている人間に、それが似ているところの肉体から分離した幻影として現れる。他の人間、動物あるいは無生物の体に入り込んだり、憑依したり、その中で行動したりする。[Tylor, (1871) 1994a : 387]

この記述とスキートによるマレー人の靈魂觀の記述を比較すると、スキートがタイラーをそのまま引用して記述したことが明らかである。ここではマレー人を「低種族」と捉えているかどうか断言することはできないが、「低種族の」靈魂觀が「マレー人の」靈魂觀として表されていることは留意すべきである。

さてタイラーの提唱したアニミズムと靈魂觀を用いてマレー人の信仰を表そうとしたスキートであるが、彼においてアニミズムと靈魂觀はどのような関係にあるのだろうか。

まずスキートによれば、アニミズムとは人間と自然(動植物・無生物を含む)に共通の生命原理 *semangat* (=靈魂) があるという觀念のことである。アニミズムが靈魂觀と関わるという点で、タイラーと同様であるといえる。しかし、タイラーはアニミズムが靈魂觀のことであるとは述べていない。タイラーによれば靈魂觀はアニミズムの基礎である。タイラーとスキートの違いが見られるのは、アニミズムと靈魂觀の関係の捉え方においてであろう。

スキートはこのアニミズムと靈魂觀の関係について次のように述べている。

一様に生命を与えられた自然 (*animated Nature*) の觀念に達したが、まだ科学的な区別をするまでには至っていないマレー人にとって、植物の靈魂についての觀念において、あるいは、動物の靈魂についての觀念においてさえ、驚くべき不自然さは何もないようである。もし我々が靈魂の憑依を創造物の半分に対して認め、他は否定するとしたら、むしろ彼〔マレー人〕はヨーロッパ人のことを非論理的で矛盾したように考えるだろう。

これがよくわかると、我々は次のことを見出す用意ができるのである。

すなわち、マレー人のアニミズム理論は少なくとも部分的に、人間、動物と鳥、植物(樹木と野菜)、ヘビと魚を含む。それは、動物、「木石や武器、船、食物、衣服、装飾品などの物体(それらは我々にとっては単に靈魂がないだけでなく、生命もない)のような」無生物へとそれ〔アニミズム理論〕を拡大することによって、「我々があまり共感をもてなさそうな」觀念に我々が直面するに至るまでである。[Skeat, (1900) 1965: 52]

スキートによれば、マレー人は自然にはあまねく生気が与えられているという観念を持っている。「生気を与えられている」ということは「靈魂をもっている」ということである。マレー人のアニミズム理論は、人間、動物、植物、無生物を区別することはない。あらゆるものが靈魂を持っているのである。すなわち、アニミズムとは、ある対象が靈魂をもっているとする観念のことだといえる。

マレー人の根本観念をアニミズムであると言う一方で、スキートはマレー人の信仰にそれとは別のもう一つの形態を見出している。

あまねく生命を与えられた自然という、この一般的概念と並んで、我々は「人間起源 (Human Origin)」という特別な理論の形跡を豊富に見出す。

[Skeat, (1900) 1965 : 53]

この「人間起源」説とは、あらゆる存在の起源を人間と考える特別な理論であるという。スキートは、「この概念の中心的観念は、動物、鳥、樹木などがかつては人間であったが、なんらかの悪い行為によって現在の姿に変えられたということであるように思える」[Skeat, (1900) 1965 : 54] と述べている。スキートによれば、マレー人の儀式において動物や植物が擬人的に扱われたり語られたりすることが、この人間起源の説のためである。[Skeat, (1900) 1965 : 54]

アニミズムが、人間の靈魂観を拡大した結果あらゆる生物・無生物が人間と同様靈魂をもつという観念に至ったのに対し、人間起源の説はあらゆる生物・無生物がもとは人間であり、それが現在の形になったとする説である。この二つの説について、スキートは次のように述べている。

これら二つの概念—「人間起源の説」か「普遍的アニミズム」か—のどちらがマレー人の信仰の原形であるかをいうのは困難である。[Skeat, (1900) 1965 : 54]

スキートはこの二つの説を全く異なるものとして考えている。人間起源の説とアニミズムとの違いは、靈魂に関わっているかどうかである。スキートによれば、前述の通りアニミズムとはある対象が靈魂をもっているという観念で

あった。

タイラーによってあらゆる宗教に内在する「霊的存在への信仰」として提唱されたアニミズムは、スキートにおいては「靈魂」に関する観念とされた。そしてこのようなアニミズム段階のマレー人は、いまだ科学的態度に至っていないとされ、ヨーロッパ人と区別される。スキートにおいては、アニミズムは「未開」に属するものなのである。

3 呪術

3. 1 マレーの呪術における共感原理

『マレーの呪術』において、「呪術」は「アニミズム」を個人の要件に適用したものであるとされていた。この節では、「呪術」についての記述を見ていく。

これまで見てきたように、アニミズムとはある対象に靈魂があるとする観念のことであった。靈魂観についての概念が、呪術やフォークロアの生じる源泉である。そして呪術は、靈魂に影響を与えたり、捉えたり制圧したり、呪術師の意思に従わせたりする方法からなる [Skeat, (1900) 1965 : 579]。スキートがこの書を記述した理由は、呪術の例とそれが基づく信念の性質を示すということであり、全編が根本観念アニミズムとその応用の呪術の例である。アニミズムの応用であるから、もちろん呪術も靈魂と密接な関わりをもつ。特に「靈魂の誘拐」は、マレー人の靈魂観念を知るうえで、考察しないわけにはいかないほど重要な事例であるとスキートは考えていた [Skeat, (1900) 1965 : 579]。スキートによれば、呪術と靈魂の関係は次のようなものである。

上記の観念〔アニミズム〕の結果として次のことが生じる。もし正しく靈魂を呼べば、靈魂はそれを聞いて従う。そしてその所持者の身体に逃げた靈魂を戻すこと (riang semangat) か、あるいは自分の思うままにしたいと思う人の靈魂を誘拐し (mengambil semangat orang) それを特別な入れ物に入れることができる。その容器とは、たとえば a) 靈魂の持ち主の体と直接的な接触によって共感的に結びついた (sympathetically connected) 土

の塊、b) 間接的な方法によって関連付けられた蠟人形、c) そのような接触を持たない布などである。それを自分の思うままにできたとき、誘拐され、監禁された靈魂は、その一時的な所持者あるいは化身に許される自由を享受する（あるいは、その何らかの損傷で苦しむ）。[Skeat, (1900) 1965 : 49]

呪術は靈魂に呼びかけ、それを従わせる。ここでは靈魂を誘拐し、特別な容器に入れる方法について述べられている。その容器のうち、a) と b) の容器は、直接的ないし間接的に靈魂の持ち主と関連付けられたものである。それを、スキートは「共感的に結びついた」と表現している。スキートによればこの共感的な結びつきこそが、マレー人の呪術において重要な要素となる。

マレーの迷信の全体系を貫き、影響を与える共感呪術(Sympathetic Magic)あるいは「作りごと (make-believe)」に注意を促がす。この形態の呪術の根本観念は「原因は結果から得られる」という原理であると言われている。

[Skeat, (1900) 1965 : 82]

スキートは、マレー人の呪術においてもっとも重要な要素が「共感呪術」であり、その根本観念が「原因は結果から得られる」という原理であるという。この「原因は結果から得られる」「共感呪術」は、イギリスの人類学者J・G・フレーザー (Frazer, James George, 1854-1941) の提唱した呪術の原理である⁴。

4 J・G・フレーザー (Frazer, James George, 1854-1941) は、1854年スコットランドのグラスゴーの商人で長老教会派の、裕福な家庭に生まれた。ヘレンズバーのラーチフィールド・アカデミー、さらにグラスゴー大学を卒業したが、タイラーの『未開文化』を読んで感動し、父の勧める実業家への道を振り切って社会人類学を志す。1873年ケンブリッジのトリニティ・カレッジに進み民俗学・神話学を専攻した。1879年には同カレッジの特別研究員となり、同年勅撰弁護人に任ぜられた。そして1907年にはリヴァプール大学教授に就任する。

彼は膨大な著作を残し、それは宗教学や人類学のみならず、さまざまな分野に及ぶ。1914年ナイトに叙任、1920年王立学会評議員、1921年トリニティ・カレッジ教授、1925年メリット勲位を受領、1931年中世寺院特別研究員、法学院名誉会員、1932年グラスゴー名誉市民に推された。また、オックスフォード大学名誉市民法博士、ケンブリッジ大学・ダーラム大学・マンチェスター大学名誉文学博士、アテネ大学哲学博士、パリ大学・ストラスブル大学名誉法学博士、英国学士院特別研究員、エディンバラ王

スキートはフレーザーの主著である『金枝篇』(*The Golden Bough*)のなかから、共感呪術の原理を引用してマレー人の呪術を記述する。

「結果を模倣することによってその結果を生み出すことができるというのが、共感呪術の原理の一つである。……もし人を殺そうと思うなら、その人の人形をつくり、それを壊す。その人とその人形との間にある物理的共感を通じて、その人はあたかも自分自身の身体になされたかのように痛みを感じる。そしてそれが壊されると、その人は同時に死ななくてはならない。」[Skeat, (1900) 1965: 82]

この一文は、スキートによる共感呪術の原理の説明であるが、実はフレーザーの『金枝篇』からの引用である⁵。スキートはフレーザーの理論を利用して、マレー人の呪術を説明する。たとえば次のような記述がある。

しばしば少年の頭髮は、誕生後、中央の一房を除いて、すっかりみじかくそられ、少年が成長しはじめるまで保たれるが、しばしばその行為は、思春期か結婚の時期まで延期される(一般的に、子どもの両親による誓いのためであると言われる)。切り落とした髪の毛には、非常に注意を払わなくてはならない(特に最初の切り落としには)。というのは、マレー人は「自分自身と自分の体のあらゆる部分の間に存在する共感的つながり(the sympathetic connection)は、身体的なつながりが切れた後にさえ存在し続け、それゆえ、切り落とした髪の毛や爪のような身体から切れた部分に降りかかるあらゆる害で苦しむ。したがって、彼は、これらの切り取られた部分が偶然傷つけられるか、彼に害を与えるか殺そうとして、それらに呪術をかけるかもしれない悪意ある人の手に渡る可能性のあるところに

室学会名誉評議員、フランス学会連合準会員、レジョン・ドヌール勲章受領、ベルギー・レオポルド勲位受領、プロシア科学学会名誉会員、王室オランダ科学アカデミー特別会員などに推され、ザハロフ講座にも1933年に出向している。ヨーロッパ全域にその名声を博した。1941年5月7日、ドイツ軍の爆撃にあい、スコットランドで夫人とともに生涯を閉じた。フレーザーの略歴をまとめるに際して、藤井 [1985] を参考にした。

5 スキートが引用している部分については Frazer [1890: 9-12] を参照。

残さないように気をつける」と深く信じているからである。[Skeat, (1900) 1965 : 44-5]

これもまた、フレイザーを引用してマレー人の信仰について説明している。この一文と、引用されたフレイザーの文を比べてみる。

野蛮人は、自分自身と自分の体のあらゆる部分の間に存在する共感的つながりは、身体的なつながりが切れた後にさえ存在し続け、それゆえ、切り落とした髪の毛や爪のような身体から切れた部分に降りかかるあらゆる害で苦しむ。したがって、彼は、これらの切り取られた部分が偶然傷つけられるか、彼に害を与えるか殺そうとして、それらに呪術をかけるかもしれない悪意ある人の手に渡る可能性のあるところに残さないように気をつける。[Frazer, 1890 : 193]

スキートとフレイザーの違いは、このような信仰を持っているのが、「マレー人」であるか、「野蛮人」であるかということである。ここでも共感的つながりに対する信仰をもつのがマレー人であるということになっている。先に見たタイラーにおける靈魂観の記述がスキートにおいて「マレー人の靈魂観」の記述になっていたのと同様である。

3. 2 共感原理を応用した呪術

スキートは、「その[共感]原理はおそらく、マレー人の『黒呪術 (Black Art)』の背後にあるすべてのものの中で、最も重要である」[Skeat, (1900) 1965 : 82] と述べ、黒呪術の形態の中でも特に、他者の靈魂を誘拐したり手に入れようとしたりする形態に注目している。その方法のもとになっているのが共感原理だからである。

より興味深いのは、他者の靈魂を「誘拐する」あるいは「手に入れ」ようとする黒呪術の形態である。その目的はそれに術者の望む影響を与えたり、その一方で犠牲者に害（狂気、病気、あるいは死さえも）を与えたりするということである。

これらの結果は様々な方法によって達せられうる。まったく接触なしで影

響が生じる方法もあり、犠牲者とその靈魂が入れられる容器のあいだにある種の接触がある方法もある。方法の例をいくつか取り上げれば、テーマのこの部分が終わるだろう。つまり、それら〔方法〕は必然的にいくらか種々雑多な特性をもつが、本当は同じ一般原理の異なる応用にすぎないということがわかるだろう。その本質はすでに靈魂の項[Skeat [(1900)1965 : 49, 50], 本論 p10]において示された。[Skeat, (1900) 1965 : 568]

他者の靈魂を誘拐するか手に入れる黒呪術には、さまざまな方法があるが、それは同じ原理の応用に過ぎない。つまり、靈魂に呼びかけ従わせるということ、共感原理によって行われるということである。

またこの黒呪術の方法は、目的は異なるが、呪医の方法に緊密に類似している [Skeat, (1900) 1965 : 568]。呪医の方法というのは、さまよう靈魂を呼び戻す方法のことである。さまよう靈魂を呼び戻す方法も、アニミズムの結果として生じる [Skeat, (1900) 1965 : 49]。

スキートによれば、アニミズムはマレー人の根本観念である。アニミズムの応用は呪術であり、その背後にあるのが共感原理である。アニミズム、つまりすべてのものは靈魂を持つという観念の結果として、靈魂に呼びかけていうことを聞かせるという行為が行われる。その後で、共感原理を利用した行為がなされる。つまり靈魂の持ち主と何らかの「共感的な結びつき」を持ったものに靈魂を入れ、所持者の思うままにする。すなわち、スキートの記述した呪術、共感原理などあらゆるものの基礎となるのがアニミズムであると言える。

4 アニミズムの変容と確立

上述のように、スキートはタイラーの「アニミズム」とフレーザーの「共感呪術」の原理を利用してマレー人の信仰を記述していたが、彼が一方的に本国の学者の理論を利用していただけではない。

フレーザーの『金枝篇』は第1版が1890年に出版され、その後第2版が1900年、第3版は1911年から1915年にかけて出版され、1936年には第13巻の補遺が

付け加えられた。第1版は2巻本だったのにたいし、第2版は3巻本、第3版にいたっては13巻にも及ぶ大著となった。これほどまでに膨れ上がった理由には、世界中—植民地からヨーロッパの農村まで—から集められた情報の増加が挙げられるだろう。その増加した資料の中には、スキートの『マレーの呪術』もふくまれていた⁶。

スキートが参照していたのは1890年に出版された『金枝篇』第1版である。1900年に『マレーの呪術』が出版されると、この書はフレイザーの『金枝篇』第3版(1911)に引用されることになった。引用されたのは、マレー人の靈魂観についての記述である。

マレー人は、人間の靈魂 (semangat) を小さい人間のようなものとして考えている。ほとんど見えず、親指の大きさで、形、比率、そして顔つきにおいてさえ、それが住まう人にぴったり一致する。この小人は、薄い非物質的な性質であるが触れることができないわけではないので、物体に入り込むことによって移動を引き起こし、あちこちにすばやく移動する。それは、睡眠、失神、そして病気において一時的に体から不在となり、死後永遠に不在となる。[Frazer, (1911) 1980 : 28]

この記述は、『マレーの呪術』におけるマレー人の靈魂観記述を引用したものであるが、スキートの記述ももとはタイラーを引用したものであった。タイラーによって「低種族の」靈魂観として記されたものが、スキートによって「マレー人の」という主語を付され、それがフレイザーに引用されることになったのである⁷。

6 『マレーの呪術』出版の経緯から、スキートとフレイザーの間に関係があったことがわかる。当初スキートはジョン・マレイ社に本の出版を依頼しようとしていたが、フレイザーに相談したところマクミラン社が薦められ、出版する運びとなった。フレイザーはスキートの著作に非常に感銘を受け、『金枝篇』の改訂版に彼の本を引用したいと言ったという。[Gulluck, 1988 : 148]

7 タイラーには靈魂の大きさについての記述がなかったが、スキートには「親指のような」という大きさについて記述がある。スキートは、「思うに、一般的に言って、靈魂はある限度内で小さいけれども正確にそれ自身の化身と対応するものと考えられている」[Skeat, (1900) 1965 : 52] と述べている。

このほかにも、フレイザーはスキートを引用して靈魂に関する慣習を列挙した。フレイザーが引用したのは、靈魂の誘拐 (soul-abduction) についての部分であるが [Frazer, (1911) 1980 : 73-5], スキートによれば靈魂の誘拐といった呪術はアニミズムの結果として生じる [Skeat, (1900) 1965 : 49]。そしてその呪術の背後にあるのが、共感の原理である [Skeat, (1900) 1965 : 82] (本論 pp.10-1 を参照されたい)。

タイラーによって提唱された「アニミズム」は、スキートによってマレー人の信仰を表すのに用いられた。提唱された当初、アニミズムは「靈的存在への信仰」と定義され、あらゆる宗教に通底するものとされていた。しかし、スキートはマレー人の根本観念をアニミズムであると捉え、その際のアニミズムは、あらゆるものに靈魂があるとする観念を意味した。それはタイラーにおいては、他の靈的存在のもととなる観念である。言葉の意味が非常に狭く捉えられているのである。

スキートによれば、呪術は靈魂に呼びかけ、術者の思うままにすることである。スキートによれば、そういった呪術の背後にあるのはフレイザーの提唱した「共感原理」である。そして、マレー人の呪術は根本観念アニミズムの応用であるとされた。やはりアニミズムは靈魂とのかかわりでのみ言及されている。

『金枝篇』において、共感原理によって呪術の分析をおこなったフレイザーは、その第3版に『マレーの呪術』を引用する。靈魂観と、靈魂を呼び戻す呪術・靈魂を誘拐する呪術についての記述である。

彼らの著作に引用される過程で、「アニミズム」、「靈魂」、「共感呪術」といった術語は、その観念が誰によって抱かれているのか、そしてどのような意味なのかということを変化させて用いられているということが出来る。特に、スキートが呪術の分析を行うさいに、アニミズムをあらゆるものに靈魂があるという観念としたことは、この過程に大きな影響を与えたのではないだろうか。彼はアニミズムを生物・無生物を問わず靈魂があるとする観念と捉え、自分たちヨーロッパ人のもつ観念とは異なるものとして記述している。すなわち、アニミズムが西欧の「文明」と対比されるようないわゆる「未開」の宗教と捉えられた

とも考えられるのである。したがって、そういった術語の確立過程には、本国の学者のみならず、植民地在住の行政官も大きな役割を果たしていたといえることができる。

〈引用文献〉

- Gullick, J. M., 1988, "W. W. Skeat and Malayan ethnography : an appreciation.", *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society*, 61 : 117-152.
- Frazer, J. G., 1890, *The Golden Bough : A Study in Comparative Religion* vol. 1 , London : The Macmillan.
- , (1911)1980, *The Golden Bough : A Study in Magic and Religion Part II*, London : The Macmillan.
- 藤井正雄, 1985, 「フレイザーの理論」, 蒲生正男編『現代文化人類学のエッセンス——文化人類学理論の歴史と展開』ペリカン社, 69-83.
- 平野孝国, 1985, 「タイラーの理論」, 蒲生正男編『現代文化人類学のエッセンス——文化人類学理論の歴史と展開』ペリカン社, 31-47.
- Kuklick, H., 1991, *The Savage Within : The Social History of British Anthropology, 1885-1945*, Cambridge University Press.
- 小川正恭, 1985, 「タイラー——文化の科学」, 綾部恒雄編『文化人類学群像 1 外国編①』アカデミア出版会, 27-41.
- Skeat, W. W., (1900)1965, *Malay Magic : An Introduction to the Folklore and Popular Religion of the Malay Peninsular*, London : Frank Cass.
- Tylor, E. B., (1871)1994, *Primitive Culture : Researches into the Development of Mythology, Philosophy, Religion, Art, and Custom* vol. 1 (a), vol. 2 (b), London : Routledge / Thoemmes.

〈キーワード〉

行政官人類学, 英領マレーシア, アニミズム, 共感呪術, 霊魂

“Armchair Anthropologists” and Colonial Officers :
“Animism” in *Malay Magic* by W. W. Skeat

Risa AIZAWA

The development of anthropology of religion in England, from the late 19th century to the early 20th century, deserves special attention. During this time, “armchair anthropologists” suggested a number of terms, such as “animism” and “sympathetic magic,” to be used in the analysis of religions. They performed research based on information documented by people living in the colonies, for example, missionaries and colonial officers. While the latter communicated with the natives in their local language, scholars, in faraway England, engaged in research by reading ethnographies produced in the colonies. Upon these, scholars forged their theories. In turn, adopting the terms put forth by the armchair anthropologists back in England, the colonists wrote more ethnographies. Then once again, the scholars read these latest writings, which resulted in new theories. In the adoption process, terms such as “animism” came to be used differently from their original meaning. Theories in the anthropology of religion were not simply generated by armchair anthropologists, but were formed through the intellectual exchange between those in England and in the colonies.

In this paper, I will focus on the works of W. W. Skeat, a district officer in the Federated Malay States. By closely reading *Malay Magic* and comparing it with the theories presented by E. B. Tylor and J. G. Frazer, we will notice that such terms as “animism” and “sympathetic magic” were conceived, adopted into theoretical research, and ultimately transformed in meaning.